

子育て支援策としての ブックスタート運動と保育者の連携

伊東久実

はじめに

未だ歯止めのかからない少子化、児童虐待の深刻化、少年犯罪の増加など、現在わが国でみられる子育ての困難化は、子育て支援の一層の進展を緊急に求めている。

政府は、平成2年のいわゆる1.57ショックを契機に、子育て支援への様々な対応を施してきた。平成6年の「エンゼルプラン」や、「緊急保育対策等5ヵ年事業」の策定、続く平成11年の「保育サービスの充実」や、「住まいづくりやまちづくりによる子育ての支援」等を具体的事業の目標とした「新エンゼルプラン」、また、平成13年の「仕事と子育ての両立支援策の方針について」の閣議決定等がそれである。平成15年には、これまでの施策について、子育てと仕事の両立支援の観点に偏り過ぎる点や、各種子育て支援制度が総合的な対策を取りにくい等の問題意識に基づき、すべての子育て家庭を対象にした「次世代育成支援対策推進法」及び「少子化社会対策基本法」が成立した。

これらの子育て支援政策の推進の中で、平成10年度から施行された「改正児童福祉法」では、地域の子育て家庭への子育て支援の努力義務を保育所に対して課し、さらに平成15年には保育士の業務を子どもの「保育」と保護者への「保育指導」と規定している。このような保育制度の改革によって、保育所においては低年齢児保育の拡充、延長保育、休日保育、また地域の子育て家庭のための地域子育て支援センター事業による育児相談、育児サークルの応援、一時保育など様々な子育て支援が実施されるようになった。

こうして子育て支援事業が定着しつつある昨今であるが、保育所長たちが自由記述アンケートに寄せた回答には、少子化対策や子育て支援のために打ち出された様々な施策は本当に子どものためになっているのかと疑問が圧倒的に多かったという。子育て支援策は、際限のない延長保育や体調不良児の保育など、保護者が働きやすくなるようにとの配慮から生まれたが、保育園がどんなにがっばっても親にとって代わることができない部分があることを示している¹⁾。つまり、時間のない中で懸命にがんばる親や、孤立して子育てしなければならない親のニーズに真摯に応える支え方と同時に、子どもの「最善の利益」が置き去りにされない子育て支援であるべきだという問題提起である。また支援を受ける側の親からも、「その気になってじっくりと情報を集めれば何かしらの「支援」は提供される仕組みが整いつつある。(中略)なぜこれだけ子育て支援が定着したのに子育てしやすい社会だという実感が得られないのか。」

¹²⁾という声が上がります。今、あるべき子育て支援とはいったいどのようなものだろうか。単なる場、時間、情報の提供にとどまらず、ましてや子育ての代替でもなく、親自身が子どもとの関わり方を学び、子どもといる生活の豊かさを実感できる支援であろう。

親が子どもと関わることを積極的に推進する国内の子育て支援の一つにブックスタート運動がある。それは、NPO ブックスタートによって推進され、各自治体に広まりつつある。ブックスタートは、1992年にイギリス、バーミンガムで始まった。もともとはイギリスの多文化状況による識字率低下という社会問題を背景にしている。この状況を治療でなく予防することが重要であるとの考えのもとに、すべての子どもが乳児期から絵本と出会うことを保障しようとする運動である。イギリス社会において大きな賛同を得て現在約9割の自治体に広まった理由の一つは、ブックスタートが単なる読書推進運動ではなく、子どもの育つ環境を豊かにする運動であると認識されたことにある。こうしたイギリスでのブックスタート運動に刺激を受けた「ブックスタート支援センター」は、2001年4月に日本型のブックスタート運動を開始した。「赤ちゃん和絵本を通して楽しい時間を共有する」というイギリスと同様の基本理念に、識字率向上という知的側面より、豊かなことばを赤ちゃん和と交わすという絵本とのかかわり、また母親の育児の孤立化に対する育児支援の重要性が込められている。現在、日本のブックスタート運動は、その市町村で生まれたすべての赤ちゃん和と保護者を対象として、0歳児検診等の機会に地域の保健センター和図書館の連携の下で行われている。保健士あるいは図書館司書は、絵本和子育て支援のメッセージを入れたブックスタートバックを保護者と直接向き合っ手渡す活動を行っている。

しかし、ブックスタートの理念和目的から国内のブックスタート運動の現状をみる時、ブックスタートが一時的なきっかけを寄与するのにとどまっているのではないかと危惧を持つ。それは現行では乳幼児検診時にブックスタートの理念説明和バックを手渡した後、フォローアップ活動として図書館和検診機会での読み聞かせ会などが熱心に行われているが、ともすると参加は、読み聞かせ和子育てに関心のある親子に偏る怖れがあるからだ。

この問題への改善策の1つは、司書、保健士、行政者、ボランティアの連携に、保育者もこれまで以上に参加することである。保育者は、日常的に子ども和保護者とのかかわることが可能で、より多くの親子にブックスタートの理念を継続的に施すことができると考えられる。保育者の参加は保護者との良好なコミュニケーションを一層促進し、やがては親の子育て不安の解消にも貢献すると思われる。

この論文では、第1章で保育者による子育て支援の現状に対する、保育者と保護者それぞれの意識を明らかにする。第2章では国内のブックスタート運動を対象にした研究の概略を報告し、子育て支援策としてのブックスタートの課題を明らかにする。第3章では、保育者によるブックスタートの実践例として千葉県茂原市の東郷保育所の取り組みを紹介する。以上から、

保育者の専門性を活かした今後の子育て支援の方向性を模索する。

1 子育て支援への保護者と保育者の意識

1. 57ショックを契機に、国は少子化対策として「エンゼルプラン」を策定し、保育サービス等子育て支援サービスの充実を掲げた。これを受けて保育所・幼稚園は社会的な要請として子育て支援への一層の取り組みを行うようになった。育児不安等についての相談指導、特別保育等の積極的実施、ベビーシッター、子育てサークル等の育成支援など、子育て中の親のニーズに見合った様々な保育サービスを整えてきた。しかし、それでもなお少子化に歯止めはかからず、児童虐待の件数も増加の一途をたどっている。今日まで行われてきた保育者による子育て支援に対して保護者は何を感じ、また支援する側の保育者はどう考えているのだろうか。

1.1 保護者の意識調査からみえてくるもの

子育て支援に対する保護者の意識について、調査報告書が明らかにしたのは以下の2点である。

1.1.1 子どもの悩みは相談しにくい

【保育園を利用している親の子育て支援に関する調査報告書³⁾によると、保護者の「保育園を利用しての感想」については、「保育者の子どもへの対応」への満足度が4.2点と他項目に比べて高い(表1)。

表1：保育園を利用しての感想

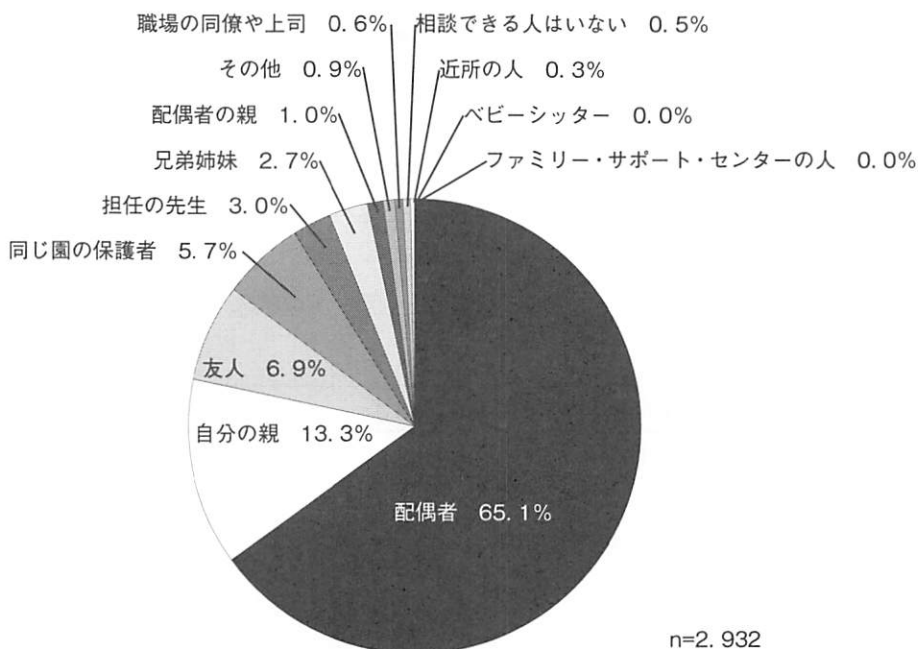
(点：1～5点)

保育園への感想に関する項目	平均点
保育方針や内容	4.2
園舎や園庭、遊具など設備	3.7
運動会、保育参観など行事	4.2
保育時間の設定	4.1
保育料の設定	3.6
保育者の子どもへの対応	4.2
ケガや安全への配慮	4.0
園やクラス、子育ての情報提供	3.8
親への支援やアドバイス	3.8
給食内容とおやつ	4.3
子どもの成長、発達	4.2
平均点	4.0

調査項目11項目中4.0点以上を得たのは「保育方針や内容」「運動会、保育参観など行事」「保育時間の設定」「ケガや安全への配慮」「給食内容とおやつ」「子どもの成長、発達」の6項目で、保護者にとっては、日々営まれる保育内容や保育者に対する要求は満たされていることがわかる。なお、点数は「とてもよかった」に5、「よかった」に4、「どちらともいえない」に3、「あまりそう思わない」に2、「まったくそう思わない」に1を配点して出された平均点である。

ところが、『乳幼児をかかえる保護者の子育ての現状』⁽⁴⁾によると、母親に対して「子どものことで気になることがあるとき、もっとも相談できる人」を尋ねた結果は、配偶者が1位（65.1%）、以下自分の母（13.3%）、友人（6.9%）、同じ園の保護者（5.7%）と続き、担任の先生（3.0%）は5位にとどまっている。この他の調査報告書⁽⁵⁾についてもほぼ同様の結果が示されている。

図1：子どものことで気になることがあるとき、もっとも相談できる人（母親）



1.1.2 保育者とのコミュニケーションに対する満足度は低い

「保育園を利用しての感想」についてのアンケート調査⁽⁶⁾では、「園やクラス、子育てに関する情報の提供」が3.8点、「親への支援やアドバイス」の項目が3.8点、と他の項目に比べて満足度は低めである。さらにそれに連動した「保育園を利用して変化したこと」⁽⁷⁾についてのアンケート調査からは「園の先生方と話し合い、学べた」が3.9点、「子育てのいろいろな情報が入りやすくなった」が3.8点であり、保護者（特に母親）と保育者の交流の様子を尋ねる以上の4項目はすべて3点台で、他の項目と比べ満足度が低い傾向にある。

表2：記入者別の保護者の変化

(点：1～5点)

		記 入 者			
		母	父	祖母	平均点
保 護 者 の 変 化 に 関 す る 項 目	自分の時間が増えた	3.2	3.3	4.0	3.3
	他の親たちと知り合え、話し合えた	4.0	3.3	3.5	4.0
	子育てのいろいろな情報が入りやすくなった	3.8	3.4	3.6	3.8
	子育てに対する精神的な負担が減った	3.9	3.7	4.3	3.9
	次の出産を考えてみようと思った	2.5	2.3	2.0	2.5
	安心して仕事ができる	4.5	4.2	4.7	4.5
	子どもの見方、子育てに広がりがあった	4.0	3.8	4.4	4.0
	園の先生方と話し合え、学べた	3.9	3.7	4.3	3.9
	家庭で園や子どもについて話せる	4.2	4.0	4.7	4.2
	保育園は子どもの発達にとって必要なものだ	4.6	4.4	5.0	4.6
	平均点	3.9	3.6	4.0	3.9

以上から、保護者（特に母親）は子どもを預けることに関しては、保育者に対して満足感を持ち、保育のプロとして信頼感を持つ割には子育ての悩みを相談する対象として考える人は少ないことが明らかにされた。また前述の調査の「保育園に望むこと」の自由記述の欄に「もう少し、相談しやすい環境、雰囲気が必要。」「親とのコミュニケーションアップ」と多々記述がある⁸⁾。保護者は、保育者の子どもへの対応に満足しており、さらに保育者とのコミュニケーションをもっと取りたいと願っている。それにもかかわらず相談対象として捉えないのはなぜだろう。「こんなこと先生に相談したら笑われる、軽蔑されるかも」といった敷居の高さを感じるのか、保育者と会話を交わす機会が少ない、あるいは多忙で送迎時の会話もままならないといった理由が考えられる。いずれにしても両者のコミュニケーションを保障し促進する手立てや機会が整備されていないからではないだろうか。

1.2 保育者の意識からみえてくるもの

支援する側の保育者は、子育て支援についてどのような意見を持っているだろうか。ここでは今後の子育て支援を考える上で参考となる以下の2点を取り上げる。

1.2.1 保護者教育の大切さ

『保育及び子育て支援に関する調査研究報告書』によると、調査対象の全国保育所数の10分の1を抽出した保育所（有効調査票数1,253）においての子育て支援実施率は、平成11年から

平成16年の5年間で全調査項目の0歳児保育、延長保育、一時保育、地域における子育て支援とも増加している。⁽⁹⁾

表3：子育て支援実施率

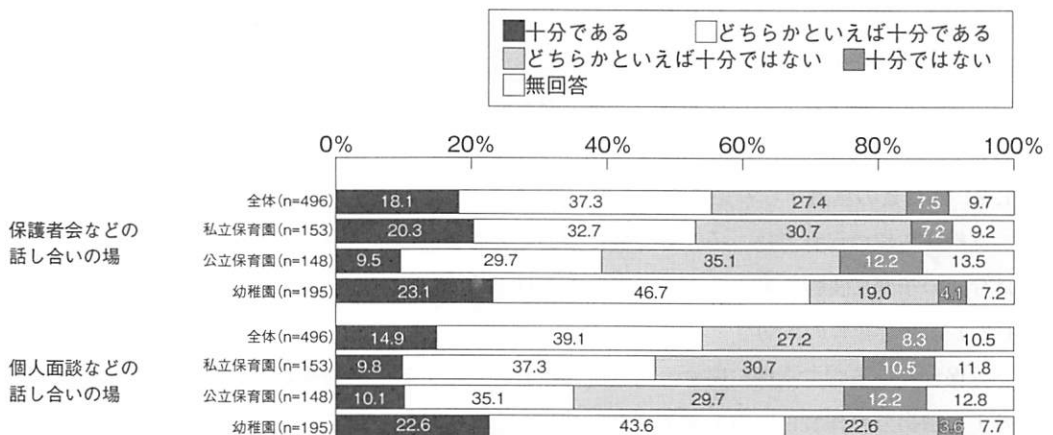
	平成11年	平成16年
1) 0歳児保育	75.4%	83.1%
2) 延長保育	32.6%	61.5%
3) 一時保育	24.2%	38.5%
4) 地域における子育て支援事業	64.2%	89.2%

しかし、通常保育と地域子育て支援事業の両立の困難さを指摘する保育所長も複数あった。彼らは不十分な財政面や職員の過剰な負担を憂慮しつつも、子育て支援への使命感から実施率を向上させていると考えられる。また、両立の困難さばかりでなく、「親子の絆を深めるためにも、もっと親子の触れ合いの時間を大切にするべきだ」という記述も多くあった⁽¹⁰⁾。保育所長たちは、保育時間の長時間化にともなう家庭の育児力の低下を危惧し、親子の絆やふれあい大切さを保護者へ伝える重要性を感じていることがわかる。

1.2.2 親とのコミュニケーションは不十分

東京、神奈川、千葉、埼玉にある私立保育園、公立保育園、私立幼稚園の計32園の保育者496人を調査対象とした「保護者とのコミュニケーションの現在の頻度は十分か」⁽¹¹⁾の質問に対する回答は以下の通りである。

図2：保護者とのコミュニケーションの現在の頻度は十分か（保育園・幼稚園別）



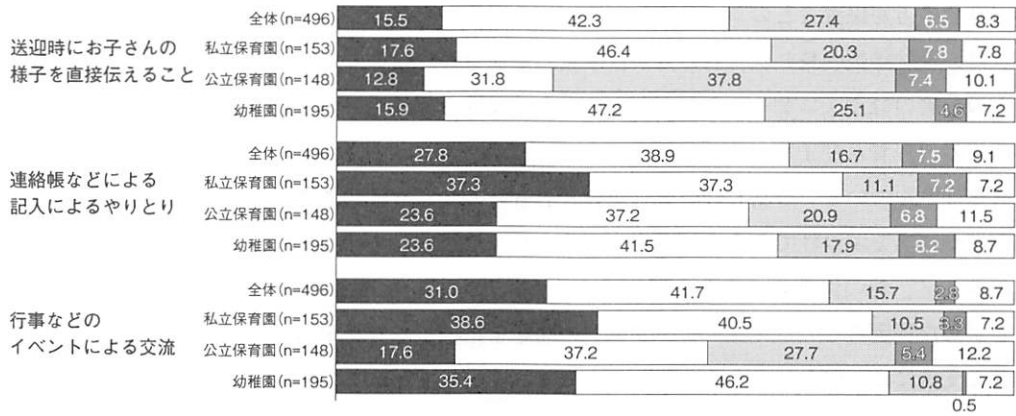
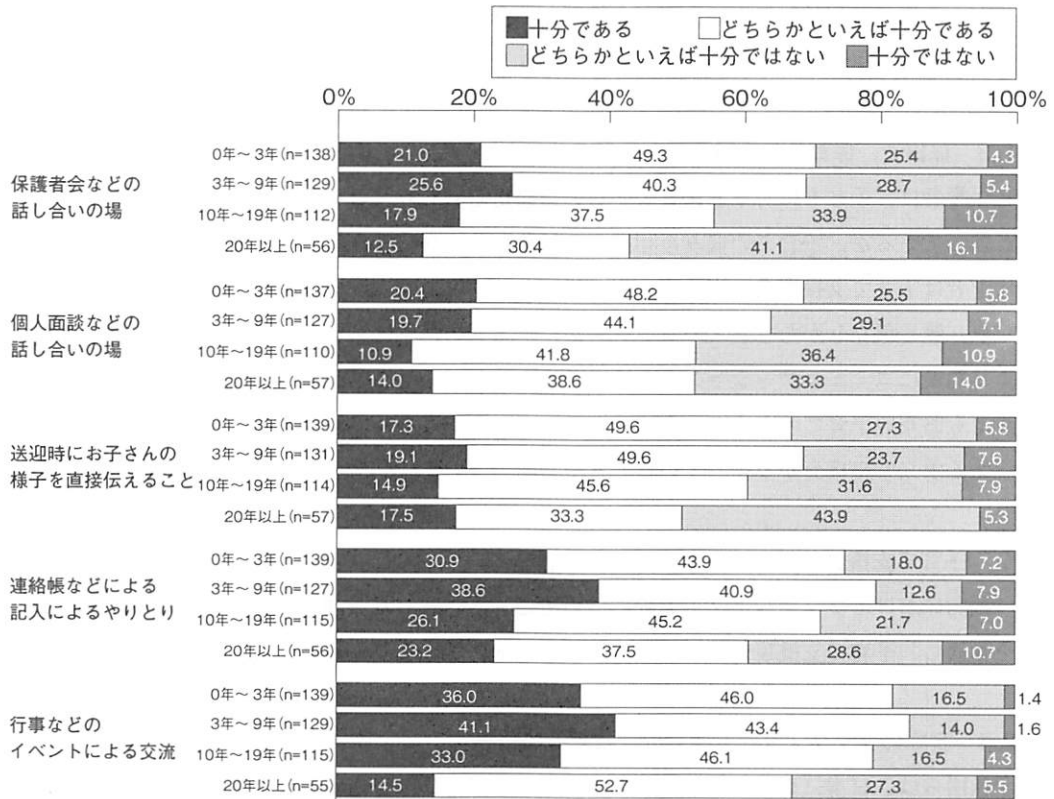


図3：保護者とのコミュニケーションの現在の頻度は十分か（保育者の経験年数別）



保育園・幼稚園別に見た場合、いずれのコミュニケーションの方法についても、「十分である」と「どちらかといえば十分である」の回答を示した割合は公立保育園の保育者の方が低い。また、保育者の経験年数と保育者とのコミュニケーションとの関係では、経験年数の長い

保育者の方が保育者とのコミュニケーションの頻度が十分でないと感じている傾向が強い。これは、経験年数の長い保育者の方が積み重ねた保育経験によってより専門性が磨かれ、保護者との一層のコミュニケーションをとることの重要性を認識しているためだと思われる。また、前述の『保育及び子育て支援に関する調査研究報告書』の施設長（園長）の回答には、「子どもをはさんでいろいろ話し合いをしたいとおもっても保育参観や懇談会には出席せず、個別に不満や欲求をぶつけてくる人がいます。その時々で対応していますが、他の子を見ず、我が子のみ、又、他の保護者の方とも関わらない人に対して、困難さを感じています」¹⁰⁹という孤立しがちな保護者とのコミュニケーションの問題を指摘する意見がある。孤立しがちな親への子育て支援には、何としてもその親とのコミュニケーションが必要であるが、この意見からはそうした親に対する具体的な対応の困難さがうかがえる。

以上、子育て支援事業は困難な点を抱えながらも実施率は確実に上昇し、そこで保育者は、子どもの最善の利益を考えて、家庭の役割と保育施設の相互の役割を見極めようとしている。その中で親と保育者の一層のコミュニケーションが必要とされているのだ。

1.3 保護者、保育者の意識調査から言えること

保護者は、子どもに対する保育者の対応に満足しており、「コミュニケーションを取りたい」と願っているが、子育ての悩みを相談する対象として保育者を低く捉える傾向にある。一方、保育者は子育て支援事業の実施率を年々増加させるとともに、その中で、コミュニケーションが取り難く孤立しがちな親との対応を考え、子どもの最善の利益のために経験の長い保育者はより頻繁にコミュニケーションをとる必要性を感じていることが明らかになった。これは、両者ともお互い子育てのためのコミュニケーションを取り合う必要性を感じながらも、それを可能する手立てや機会が不足していることを物語っている。

2 子育て支援としてのブックスタートの課題

国内におけるブックスタート運動についてこれまで行われた調査研究から明らかにされた点を要約し、子育て支援策としてのブックスタートの課題を明らかにする。

2.1 日本のブックスタート運動のこれまでの成果

秋田らは、日本におけるブックスタートのねらいを「学力保障の面ではなく、絵本を通して親子がよりよい絆を築く育児支援として位置づけられている」¹¹⁰と述べ、行政、民間施設、幼稚園、保育園は単独機関として講演会や相談などの情報提供を行うことが多いのに対し、ブックスタートの特色は子どもにとって意味のある文化財としての絵本という「もの」を直接配布し、様々な機関が連携して育児支援をしていく点であるとしている。秋田らは、ブックスター

トにおける親の意識調査を行い、「ブックスタートプロジェクトにおける絵本との出会いに関する親の意識(1)・(2)」にまとめた。

(1)では、ブックスタートバック配布群と無配布群の相違について、乳児検診に訪れた4ヶ月児を対象に①育児ストレス、②同世代の母親との交流状況、③家庭内での育児サポート状況に差異があるかを調査した結果、①、②、③とも差異がなかったことを明らかにしている。しかし、バック配布による行動変化の認識調査は、「母親の絵本への興味関心の喚起」、「家庭内での母親の行動変化」の項目の値が高く、「父親の育児参加」や「家庭外への母親の行動変化」は低いという結果が出た。これら2つの調査より、4ヶ月齢という時点ではバック配布は、対象者（S区3箇所での4ヶ月児検診に訪れた200名、約75%が専業主婦）にストレス低減の効果をもたらさず、ブックスタートバックへの親の満足感と興味関心を高め、子どもの環境を改善する意欲を向上させた点を明らかにした。

(2)では、同じく4ヶ月児を対象に、「赤ちゃんとの絵本の出会いの実態を親の意識から明らかにする」¹⁰ことを目的に調査が行われた（調査対象者は、(1)と同じ）。4ヶ月児で図書館を利用している親は、読み聞かせの実施率、頻度も高く、子どもが絵本を楽しめると考える時期も早いこと、また、早期からの頻繁な読み聞かせ行動をしている親子は「子どもとのゆったりとした情緒的な結びつきを大切にする」傾向があることを示した。

さらに秋田らは、乳幼児が家庭で絵本と出会う過程で現れる母子相互作用に関して、読み聞かせに付随する会話には、親が本文を解釈したり、絵を読みとって言葉に置き換えるなどして、絵本と子どもの仲立ちとなるので、親の与える言語情報が多いことを指摘した。また、母親にとって乳児への絵本の読み聞かせは「絵本について話す場」となり、様々な発語の形態で子どもに話しかけ、絵本を介して子どもの反応を引き出し、母子間でのやりとりを作り上げる場となっている点を明らかにした。¹¹

梶浦は、ブックスタートの効果について、9、10ヶ月児を対象としてバック配布2週間後以降に保護者が記入する方法で調査した（117組の親子の回答）。その結果、ブックスタートは保護者の絵本に対する興味関心を喚起し、家庭内部で父親や他のきょうだいも一緒に絵本と関わるきっかけを提供し、さらには父親の子育て参加が促進されることを明らかにした。¹²

また梶浦は、バック配布から2年経過時の3歳児がいる家庭を対象に、バック配布についての意見や配布後の行動変化や絵本の読み聞かせの実態を調査した。その結果、バック配布により「親が絵本に興味をもつようになった」「絵本を買うようになった」「プレゼントに絵本を貰いたいと思うようになった」「絵本の読み聞かせが楽しくなった」「他のきょうだいも絵本をみる機会増えた」という絵本に関わる行為項目は、前回の調査結果と比べその傾向に大きな違いはなく、「とてもそうである」「そうである」を合わせた割合が高かった。しかし、絵本が直接プレゼントされた直後よりも、その割合はどの項目も2割前後低くなっていた。なお、「図書館

で絵本を借りるようになった」が前回に比べ1割以上増えて4割を占めているが、この増加に関してはブックスタートとの因果関係は示されていない。梶浦自身も言及するように、対象児の成長に伴う自然増の可能性もある。また、父親が絵本の読み聞かせをしている家庭では、父親による他の育児行為も多く、家庭の育児支援面におけるブックスタートの効果を示唆した。⁴⁷⁾

以上から、ブックスタートの成果と現状は4点に集約される。

- 1) 子どもにとってのより望ましい環境整備に対する親の関心を高める。
- 2) 絵本を介して母子間でのやりとりが作り上げられ、同時に母親以外の人とのかわりのきっかけを生む。
- 3) 父親の積極的な育児参加を促す。
- 4) 絵本がプレゼントされた直後と2年経過時点と比べると、絵本に関わる行為が全体的に消極化している

2.2 フォローアップ事業

2.1で示されたように、子どもにとってより望ましい環境設定や、関係性の促進、父親の積極的な育児参加という種を各家庭に蒔くブックスタート運動は、日本各所で広まりをみせている。しかし、2年経過時点では絵本に関わる行為が低下していることも明らかになった。大切なことは、この種に継続的に水をやり、すべての種の発芽を保障することである。つまり、ブックスタートのフォローアップがすべての子どもに可能な限り継続して行われることが重要であろう。

現在、各地域で取り組まれているブックスタート運動は、乳児検診時などに、保健士や図書館司書が中心となって、ブックスタートバックを手渡して保護者に赤ちゃん絵本を開く時間の楽しさを伝えている。検診実施当日以降も、連携機関によってフォローアップ事業や、手渡せなかった対象者へのアプローチが行われている。フォローアップ事業の内容は、図書館では乳幼児向けのお話会やわらべうたの会の実施、赤ちゃん絵本コーナーの充実、絵本相談の設置、赤ちゃんに優しい図書館づくり（授乳スペースやベビーカー置き場設置）が推進され、子育て支援センターでは絵本の紹介、子育てや読み聞かせに関する講座などが実施されている。

しかし、これらのフォローアップ事業への参加は、絵本や子育てに強い関心をもつ特定の親子に限られているという心配はないだろうか。

山梨県内におけるブックスタートのパイオニアである中央市立図書館(玉穂生涯学習館)は、ブックスタート後の図書館利用に関する保護者の意識を調査した。⁴⁸⁾ 2001年の調査では、ブックスタート後に「図書館に連れて行ったり、おはなし会に興味を持つようになった」と回答した割合は、47.1%である（「とてもそうである」「そうである」「割とそうである」と答えた合

計)。2002年の調査では「図書館によく行くようになった」と回答した割合は、69.4%である（「とてもそうである」「割とそうである」と答えた合計）。つまり、積極的にブックスタートとそのフォローアップに取り組んでいる玉穂町の取り組みにおいてさえ、2001年では半数以上が、2002年では1/3近くがフォローアップに参加していないことになる。

この結果から考えなければならない点は、子育て支援としてのブックスタートの理念が実現されるための継続的なフォローアップの手段である。ブックスタート後も絵本や図書館に対する関心の変化がなく、絵本や子育ての楽しさを比較的感じない親に対してどのようにフォローアップしていくかである。多くの人々の連携のもとに蒔かれた貴重な種は、確実に実を結ばせなければならない。

3 子育て支援としてのブックスタートと保育者の連携

1章で問題とした、親が子育てで不安を保育者に気軽に相談できる、子どもを中心に据えた円滑な交流を促進し、かつ、2章で問題としたブックスタートの子育て支援の理念を実現させるフォローアップを行うという課題への解決策はあるだろうか。

千葉県茂原市の東郷保育所は平成16年度に千葉県の委託研究として、ブックスタートの趣旨を保育に採り入れ、子、保護者、保育者が共に育つ保育をテーマに研究に取り組んだ。その研究報告書「1、2歳児の現状と、保育・子育て支援のあり方—共に育つ保育—」¹⁹⁾は、この課題を解決する可能性を示している。本章では、この研究報告書を詳細に検討し、子育て支援としてのブックスタート運動への保育者の連携の意義を探る。

3.1 研究の概要

- ・実践者：茂原市立東郷保育所（千葉幸枝施設長）保育士 白鳥文子・田邊秀子
- ・テーマ：1、2歳児の現状と保育・子育て支援のあり方—共に育つ保育—
- ・テーマ設定の理由：核家族の増加による地域連帯の希薄化、保護者の若年化と子どもとのコミュニケーション不全、子育ての孤立しがちな家庭の増加という入所児の家庭背景を改善するため、ブックスタートの趣旨を採り入れた。わらべうたや絵本を通して、心安らく楽しい子育ての時間の重要性を保護者に理解してもらい、子ども、保護者、保育士の共に育つ保育を目指す。
- ・対象者：ひよこ2組（0、1歳児）15名
- ・研究方法：①平成16年4月時点で、保護者に対し、茂原市で行うブックスタート事業を知っているか否か、又、わらべうたや絵本に対してどう思っているかをアンケート調査する。
②①のアンケート調査の結果を参考に年間指導計画を作成し、保育実践を記録しながら家庭との連携を深め、子ども、保護者、保育士の心の動きを考察していく。③保護者がわらべう

たや絵本を介して子どもと接する中で、子育てが楽しいと思えるようになったか、平成17年1月に再度アンケート調査を行う。

3.2 研究の詳細

東郷保育所での取り組みを年間指導計画に基づいて、1期（4・5月）、2期（6・7・8月）、3期（9・10・11・12月）、4期（1・2・3月）に分けて保育者によるブックスタートのフォローアップを考察する。

3.2.1 年間指導計画に基づく1期、2期の取り組み

4月のアンケート調査の結果からは、対象児15人中12人の保護者が茂原市で行われる10カ月児を対象としたブックスタート運動を知っており、家庭で絵本の読み聞かせを行っている9件中、読み聞かせを始めた時期は10カ月という回答が4件であった。また、わらべうたや絵本を取り入れる保育について賛否を問う質問に対しては、14人の保護者が賛成している。

1期（4・5月）は在園児4名、新園児11名で新年度をスタートした。この時期保育者は、一人一人の子どもが新しい環境に慣れ、安定して登所することを最優先している。その一手段としてわらべうたや手遊び、絵本をとおしての保育者と子どもの親しい関係作りが展開された。「ちょちょちあわわ」や「げんこつ山のたぬきさん」などのわらべうたや手遊びをしながら個々の子どもとのスキンシップが図られた。絵本に関しては、子どもたちにとって身近な題材や生活を扱った絵本を選択し、絵本の時間を設定して、絵本「くだもの」では手に取り食べるしぐさを楽しみながら読む工夫がなされた。また子どもが個々に読み聞かせを要求してきた場合は、一対一でいねいに語りかけながら読み聞かせたり、クラスに共通の興味ができるように、保育者が選んだ絵本を数人のグループごとに読み聞かせる工夫がなされた。こうした中で子どもたちは新学期の不安を感じて泣きながらも、絵本に興味や親しみをもち始め、しだいに好きな絵本の読み聞かせを繰り返し保育者に求めるようになっていった。

ここではブックスタートのポイントである「あたたかくて楽しいことばのひととき」が保育者によって保障されていること、そしてこの時間が子どもたちの不安を取り除き、子どもと保育者の関係形成のきっかけとなっていることがわかる。手遊び、わらべうた、そして絵本は、子どもが保育者と親しい関係を作ることに大きく貢献している。

2期（6・7・8月）には0歳児4名が入所し19名になる。保育所の生活に慣れ、言葉の発達が見られるようになった子どもは、絵本を見ながら保育者の真似をして楽しむようになった。絵本への興味を示す子どもが増え、読んでもらうことが楽しむ様子が見られるようになったところで、保育者は絵本のストーリーに添った遊びを展開させていった。「きんぎょがにげた」からはペットボトルのふたで作った手作り金魚を用意し、プールあそびに取り入れたり、室内では金魚さがしごっこを行っている。「のせてのせて」からはダンボール箱を車にみたくて、ぬ

いぐるみを乗せたごっこあそびや、さらに布をトンネルにみたくてぐるあそびへと発展させていった。保育者の働きかけの下、子どもたちは同じ絵本からそれぞれの遊びを楽しんだり、友達の遊びに影響を受けたりしている。保育者は十分な環境構成と、子どもたちへの働きかけを配慮しながら、遊びという形で絵本の楽しみを広げていった。

これは絵本の楽しみを一層増加させる、保育者の専門性を活かしたブックスタート運動のフォローアップの一つと言える。これまでブックスタートへの保育者のかかわりは、絵本に関心を持った住民を対象に「赤ちゃん絵本」に関する絵本講座を開催したり、ワーキンググループメンバーとして、ブックスタートの学習会で赤ちゃんの発達や、わらべうた、手遊びうたの講師等を行っている。²⁹ 2期での絵本を題材にしたあそびの展開は、これまでの保育者とブックスタート運動の関わりを一層広げるものといえる。絵本からの遊びの発展は、子どもたちに絵本への関心と楽しみをより高める、保育者ならではのブックスタート運動へのアプローチと言えるだろう。

3.2.2 3期4期の取り組み

3期（9・10・11・12月）になると子どもたちは、保育者との信頼関係を強め、少しずつ絵本を自分から選び、一人で見たり「読んで」と保育者に持って来るようになった。子どもたちが、保育者や絵本とかかわりを深めていく中で、保育者は、絵本を通して親子のコミュニケーションをとる機会の設定や工夫を行っていった。日頃保育所で見ている絵本を家庭でも楽しめるように貸し出しコーナーを作り、運動会では競技内容に子どもたちが楽しんでいる絵本とわらべうたを取り入れ、保育参観では子どもたちのお気に入りの絵本からのごっこ遊びを行い、絵本を介しての子どもと親と保育者のふれあいを積極的に展開している。

3期は、絵本への関心や楽しみを子どもと保育者の間だけではなく、保育者、子ども、親の三者で共有をし始めている点が注目される。それは、絵本を介して子ども—保育者—親のかかわりを促進し、楽しい子育ての時間をみんなで分かち合おうとする試みである。子どもにとっては保育者からだけでなく、今度は親からの愛情に満ちたことばを語りかけられる幸福と、親にとっては心の安らぐ子育ての時間を持つ幸福の橋渡しを保育者が継続して担っているのである。

まずは、日頃子どもたちが保育所で見ている絵本を家庭でも楽しめるように貸し出しコーナーを作り、貸し出しを開始している。子どもたちが自由に絵本を取り出して見られるように工夫を施したブックポケット（本棚の転倒を避けるため、あえて本棚に陳列せず、絵本の表紙が一目でわかるよう透明なビニールケースを子どもの手の届く低い壁へ取り付けたもの）を部屋に取り付け、家庭への貸し出しを薦めた。保育者の記録には、貸し出しを始めたことで「送迎時や連絡帳で家庭での絵本を通してのコミュニケーションの様子が聞かれ嬉しく思った。」²⁹と記されている。保育者によって絵本への親しみを日常的に養われ絵本を借りて行きたがるよ

うになった子どもは、新たに親とのコミュニケーションの手段も得たことになり、子どもの積極的な姿勢を歓迎し、忙しいながらも時間を割いて読み聞かせの時間を設ける母親の様子がかがえる。たとえば、「絵本の読み聞かせの時間が増えたか」という保護者に対するアンケート（1月実施）調査には次のような回答が寄せられた。「子どもの方からよんで欲しいと催促される事が多くなり読み聞かせの時間が急激に増えました。母親の手が家事等で空いていない時は、自然と父親の方へ本を持って行き読んでもらってます。父親も子どもの反応が良いので一生懸命読み聞かせをするようになりました。」

さらに、以下に示す母親の記録からは、保護者の絵本を介した子どもとの関わり方が、子どもを通して母親に伝わったことがわかる。これは子どもとの関わり方に困難を感じている親に対する有益な指導である。

「大きなかぶ」の本を寝る前に読み聞かせました。さすがに保育所で練習済み（笑）のかけ声は上手にできて本人も少々興奮気味!! 寝付けないかなあと思いましたがさすがに4、5回続けて読んだので、いつも通りにz z zでした。しかし!!! 早朝、じいちゃんじいちゃんと、またこの本をよんでとさいそくされました。²⁴

今日（昨日）は夕方園から借りてきた「くだもの」の本を読んであげました。ひざの上で目を輝かせ、果物の絵をつまんで実際食べるまねまでしていました。おやつで出した苺を持ってきて（絵をさして）「同じ〜!!」と言って喜んでいました。こんなに本に反応を示すなんて母としてもビックリ!!です。²⁵

「おおきなかぶ」をかけ声高らかに読んだり、「くだもの」の中のいちごを手に取り食べるしぐさを楽しむ読み方は、どちらも日常の保育の中で保育者と子どもが楽しんできた絵本の読み合い方である。これを、講義形式で「絵本の楽しみ方とは」とか「子どもと楽しさを分かち合う方法とは」と題して啓蒙するのではなく、実際に子どもの行為として楽しみ方を親に伝え、子どもの姿から親が喚起されて楽しみを共有していることに価値があると言えよう。まさに保育者がブックスタート運動に連携する意義を提示していると言える。

また、絵本を介した、保育者、子ども、親の三者の楽しみの共有は絵本の貸し出しに留まらず、保育参観においても確かな手ごたえを得ている。

今までいろいろな絵本を読み聞かせた中で、子どもたちが特に気に入ったのが「大きなかぶ」の話だったので、それをごっこ遊びに展開し（保育士がかぶになりみんなで力を合わせて抜く）保護者に見てもらった。登場人物を子ども達の名前に変えて一人ずつ呼び「う

んとこしょ！どっこいしょ！」とかけ声をかけると、さあひっばるぞ〜という気持ちが見られ一緒に引き元気なかけ声が聞かれ、かぶが抜けた瞬間保護者からたくさんの拍手をいただき子ども、保護者、保育士と一緒に共感できすばらしい参観になった。⁶⁹

保育者はさらに「父母に保育所の行事に参加していただいた事により保育現状を知り、共通の体験を持てたことで意思の疎通が少し出来たと思う⁷⁰」と記している。日頃、親にとって相談したくても相談できない保育者とコミュニケーションを取る手立てとなるものは、ここでは具体的「もの」である絵本であった。子どもの絵本とのかかわりの様子を連絡帳を通して親に伝え知ってもらい、絵本を仲立ちにして、保育者、子ども、親が、互いに共通の体験と共通の言葉を持ち、相互理解が徐々に促進されていく様子がわかる。

4期（1・2・3月）も引き続いて絵本の貸し出しが行われ、1月には、4月から行われてきたわらべうたや絵本を取り入れた保育によって子どもと保護者がどのように変化したかを問うアンケート調査を実施した。回答には「絵本やわらべうたを通して子どもとの接触が増えた」「父親も一生懸命読み聞かせをするようになった」など、絵本を仲立ちにして親子のコミュニケーションが確実に促進されている様子が示されている。中でも、「親が子どもからうたを教えてもらって一緒に遊んでいる」という記述があるが、これこそ保育者と子どものかかわりを経て、親が子どもとの新たなかかわり方を発見したことの証明であると言えよう。

3.3 子ども—保育者—親の交流を保障する保育者によるブックスタートの可能性

東郷保育所の取り組みは、子育て支援としてのブックスタートへの保育者の連携について大きな示唆を与えている。それは保育者がブックスタート運動に連携することで、子どもは保育者と親から愛情に満ちたことばを語りかけられる温かい時間が継続的に保障されるということだ。また親は絵本を仲立ちとした楽しい関わりを保育者と共有することにより、子どもとも保育者ともコミュニケーションのきっかけを与えられるのだ。

保育者を信頼はしているものの、相談相手にはしづらいという親の意識と、親とのコミュニケーションが不十分と感じる保育者の意識のずれを解決する手立てとして、また、子どもが愛情豊かに生まれ、親の子育てを支援する手立てとして、保育者がブックスタート運動に関わる意義は高いだろう。

東郷保育所では、日常の保育に具体的「もの」である絵本を積極的に取り入れることによって、保育者が日々温かいことばで満ちた楽しい時を子どもたちに保障していた。保育者と子ども間に成立するこうした楽しい交流は、保育者の啓蒙として親に伝えられるのではなく、子どもから親へ直に伝播する。そこから生まれた親の喜びは保育者理解と保育者との交流へと連なっていく。

コミュニケーションが苦手な親に対して保育者が、間接的ではあるが積極的なアプローチを示すことで、子育ては楽しく豊かな行為であるという意識を喚起させることは可能だ。子育て支援は親の子育てにかかる時間的・精神的負担を軽減するための居場所と時間を提供すると同時に、保育者の専門性を活かして、子育てそのものの楽しさや豊かさを親に実感させる子どもとの関わり方も提示されるべきであろう。

なお、東郷保育所でのこの実践例は保育所に通所している1、2歳児を対象としているが、他の年齢、および地域子育て支援センターでの保育実践でも可能であると思われる。

4 おわりに

「子育て支援が定着したのに子育てしやすい社会という実感が得られない」⁹⁹という言葉を目にした時、子どもの発達保障と、親の子育て支援はどうあるべきかという課題を今更ながら突きつけられた思いがした。当然のことながら独り子育てをがんばっている親に時間と場所、情報の提供を行い、育児の重労働とストレスの軽減を図らなければならない。同時に、「子育て支援」ということばが広く行き渡った今日、子育ての楽しさを実感することで、親の子育て不安が解消され、子どもにとっての最善の利益が保障される子育て支援のあり方を考えなければならない。そのあり方の1つを東郷保育所の取り組みに見た。ここには、ブックスタートの「赤ちゃんと絵本をとおして楽しい時間を共有する」という基本理念が日々の保育の中で実現されていた。さらにこの楽しい時間は、保育者を仲立ちとして親と子に継続的に保障されていた。保育者は保育所での子どもと絵本の読み合いを通して発見した、その子なりの楽しみ方を保護者に伝え、保護者に子どもと保育者への理解を促がした。子育てのプロである保育者が、子どもと親と弛みない交流を持ち、子育ての楽しさを自然に伝えていくこの取り組みは、保育者だからこそ可能となる子育て支援策と言えるのではないだろうか。こうしてきっかけを与えられた子どもと親の喜びの共有は、様々な場面で子育ての楽しさ豊かさをもたらすことになるであろう。

注

- (1) 社会福祉法人日本保育協会、「保育及び子育て支援に関する調査研究報告書」2005、社会福祉法人日本保育園協会、p. 47
- (2) 近藤亜矢子 「家庭の今と子育て支援」『21世紀に大切にしたい保育観 子どもたちがもっと子どもらしく生きられるために』、社団法人全国私立保育園連盟、p. 2
- (3) 東社協保育部会調査研究委員会、「保育園を利用している親の子育て支援に関する調査報告書」2005、社会福祉法人 東京都社会福祉協議会、p. 27。なお、この調査の目的は認可保育園の利用者が実際に園を利用して感じていること、本当の意味での子育て支援のために求

められている体制、認可保育園に期待する役割を明らかにすることと記されている。また調査対象と方法は、東京都社会福祉協議会に加入している23区及び27市の公立・私立保育園から、各区市別・公私立別に各1園程度の保育園を抽出し、在籍する5歳児の保護者に対しアンケート調査が実施されている。

- (4) 社団法人全国私立保育園連盟、「乳幼児をかかえる保護者の子育ての現状」2006、p. 28。
なお、この調査の目的は乳幼児を抱えた保護者の子育ての不安や悩み、出産意欲、保育環境の現状の把握である。保育園・幼稚園、子育て広場について、保護者、保育者、園長に対して尋ねている。引用したデータの調査対象は、東京、埼玉、千葉、神奈川の私立保育園、公立保育園、幼稚園の計38園で、その内32園の母親3303人の回答を得た。
- (5) 「子育て支援データ集2005年度版」 p. 133、p. 159
- (6) 前掲書、(3)、p. 27
- (7) 前掲書、(3)、p. 33
- (8) 前掲書、(3)、pp. 102 ~ pp. 121
- (9) 前掲書、(1)、pp. 59 ~ pp. 61
- (10) 前掲書、(1)、p. 47
- (11) 前掲書、(4)、p103、p104
- (12) 前掲書、(1)、p. 70
- (13) 秋田喜代美・横山真紀子・ブックスタート支援センター「ブックスタートプロジェクトにおける絵本との出会いに関する親の意識(1)」2002、日本保育学会55回大会発表抄録
- (14) 秋田喜代美・横山真紀子・ブックスタート支援センター「ブックスタートプロジェクトにおける絵本との出会いに関する親の意識(2)」2002、日本保育学会第55回大会発表抄録
- (15) 秋田喜代美・横山真紀子・森田祥子・菅井洋子「ブックスタート協力過程の母子相互作用」2003、日本発達心理学会第14回大会発表論文集
- (16) 梶浦真由美「北海道恵庭市におけるブックスタート(その1)」2002、日本保育学会55回大会発表抄録
- (17) 梶浦真由美「北海道恵庭市におけるブックスタート(その2)」2006、日本保育学会59回大会発表抄録
- (18) 「「はじめての絵本」読書環境意識調査報告書 2001年度版」玉穂町生涯学習館
- (19) 「1・2歳児の現状と保育・子育て支援のあり方—共に育つ保育—」長生支会東郷保育所 2005
- (20) ブックスタートハンドブック実施編 第4版 2006 特定非営利活動法人ブックスタート
- (21) 前掲書(19)、p. 14
- (22) 前掲書(19)、p. 15

(23) 前掲書(19)、p. 15

(24) 前掲書(19)、p. 13

(25) 前掲書(19)、p. 16

(26) 前掲書(2)、p. 2

【キーワード】 子育て支援

ブックスタート

保育者の専門性